

『源平閼諍録』における義経像

畠 中 愛 美

キーワード…『平家物語』『源平閼諍録』 源義経

一、はじめに

源平合戦で功績を挙げた源義経は、後に兄頼朝から謀叛の嫌疑をかけられ、奥州でその生涯を閉じた。輝かしい活躍に反して追討された義経を、世の人々が悲劇的英雄として愛好したことは多くの説話や伝承、文学作品等から明らかである。『平家物語』は諸本によって大小様々な異同が見られるものの、義経の勲功は疑いなく、頼朝に追われる点も共通する。しかし、読み本系に属する『源平閼諍録』(以下、閼諍録^①)は他本とは異なる義経像を描いている。それは頼朝・梶原景時といった義経の凋落を招く人物との関係によるところが大きい。本稿では、巻五「義経、浮嶋原において副將軍と成る事」、巻八之下「卿相の頸、獄門の木に懸けらるる事」、巻八之下「惟盛、熊野参詣の事 付那智の湍に身を投げらるる事」の記述から頼朝・景時との関係を確認し、巻八之下「一

谷・生田森合戦の事」における義経の描写から、描かれ方自体にも工夫が見られることを述べる。

二、閼諍録の研究史

閼諍録について最も早く言及したのは山田孝雄氏^②で「平家物語の別本と称すべきものに源平閼諍録といふものあり」、「十二巻にして、これを上下に分ちたる事もありたるなるべし現存の五冊につきて察するにその内容は、本系的説話に於いて盛衰記よりも一層増加せるものあるを想像しう」、「而この本はかく本系的説話の饒多なるに拘らず傍系的説話は之に比して多く増加せず」、「奥書にては延慶本を古しとし、之に次ぐを源平閼諍録とす」と述べる。高橋貞一氏は「八坂流系統の本に近い性質を有しながらも而も八坂流本と異なる記事も多く、甚だしい補訂を施された伝本と見るべく、延慶本・長門本・盛衰記

出現の過程を示す「伝本」と位置付けた。これらを受け、渥美かをる氏は本文の簡略さから「この本はまだ十二巻本に成長していなかったかなり簡単な平家物語を原拠として作られたのではなからうか」と指摘した。山下宏明氏は『平家物語』が東国武士によって受容され、再構築されたものが闘諍録であるとし、源氏挙兵の記事について「延慶本などがとにかく問題を頼朝中心に、頼朝の側から千葉氏の動きを描くという態度を保っているのに対し、闘諍録は千葉氏の動きの側から頼朝を描くという態度が前面に押し出されている」と述べ、「平家物語が語り物として語られている頃其の或る一つの平家物語が東国にも行われ、千葉一族の関係者の或る者が此の平家物語を愛好すると同時に、逆に自らの家に伝わる頼朝挙兵当時の先祖の功績を其の中に書き込める、といった過程を経て成立したものが本書ではなかったか」とした。以上の論考から、高橋貞一氏は「源平盛衰記、長門本平家よりも後出であると謂うべき」と訂正した。闘諍録が原平家に近いものとする考えが否定されて以降、成立時期、本文の生成基盤、とりまく人々に論点が移る。

闘諍録の独自本文や人物造型については福田晃氏が「頼朝の隠忍・苦難時代を語る物語」から名付けた「頼朝伊豆流離説話」の論考を始めとして、梶原景時の造型

についてや東国武士の描写に着目したものが見られる。^⑩中でも福田豊彦氏は、歴史学の立場から千葉氏とその周辺の動向、千葉氏嫡家に伝わる伝承を分析し、「千葉氏嫡家に近い立場にある東国育ちの者が、十三世紀後期に整理された千葉妙見宮説話と同系の説話をもちこみ、作りあげたものとみて大過なからう」と述べ、十四世紀に成立したものである。

成立圏・成立時期・構想・文学的方法・本文成立等を論じた早川厚一氏は、卷一之上には「序章に続けて記す詳細な坂東平氏系譜と、中程に記す頼朝の伊豆流離説話」、卷五には「源氏の勝利を前提とする形で、頼朝の東国平定への進攻」、卷八之上には「京に入った義仲とその郎等達の興亡」、卷八之下には「平家討滅の大將軍であった義経の動向を主に追うことにより、源氏に敵対した平家一族の衰滅の様」が描かれており、「源氏の側から描き直された源平の闘諍の物語としては必要な卷々を残している」とし、五巻で完成された形態である可能性を提示した。

三、義経と頼朝の関係―素材の選択―

闘諍録において義経が最初に登場するのは挙兵した頼朝の許へと馳せ参じた場面である。

兵衛佐、且く浮島原に永綏御坐けるにや、年廿計なる若武者、白き弓袋差せ、清気なる乗代二十騎計相具して、兵衛佐の陣に打寄せ、「前近く見参に入させ給へ」と言たりければ、兵衛佐此れを聞き、「彼は何なる人ぞ」と問ふ。「此は故下野左馬頭の子に牛若と申し候しが、奥州へ下向して男に罷成後、九郎冠者義経と申す者也。御合戦の由を伝へ承、参り向仕り候ふなり」と申されければ、兵衛佐此れを聞き、涙を流し言ひけるは、「実に然る事候らん。合戦の由聞食されて急ぎ御坐たる事、返々神妙なり」と、対面して言けるに、「昔八幡殿、後三年合戦時、舍弟刑部丞義光、禁中に候けるが、合戦の由聞き、御門に暇を申けるに、御赦し無かりければ、花洛を出でて金沢館へ来ければ、八幡殿殊に悦で、『故頼義朝臣御坐たるにこそ覚れ』とて涙を流し、是に力を得、武衡を責落としけり。只今殿の御坐たるに、故左馬頭殿御坐たるにこそ」とて、共に涙を流されけり。(巻五「義経、浮嶋原において副將軍と成る事」)

頼朝は浮島原で義経と再会を果たす。¹⁶⁾この場面は読み本系にのみ見られ、頼朝が後三年合戦を想起する本文(闘諍録・南都本・源平盛衰記)と、項羽と沛公の逸話

を想起する本文(延慶本・長門本・四部合戦状本)の二つに大別される。前者では義経の言葉も描かれる。以下に後者の本文である延慶本を引用する。

サルホドニ、兵衛佐ニハ、九郎義経奥州ヨリ来加リケレバ、佐、弥力付テ、終夜、昔今ノ事共ヲ語テ、互ニ涙ヲ流ス。佐、宣ケルハ、「此廿余年ガ間、名ヲバ聞ツレドモ、其貌ヲ見申ザリツレバ、イカガシテ見参スベキト思給ツルニ、最前ニ馳来給ヘバ、故頭殿ノ生婦給ヘルカト覚テ、タノモシク覚候。彼項羽ハ、沛公ヲ以テ、秦ヲ滅ス事ヲ得タリキ。今頼朝、次將ヲ得タリ。何ゾ平家ヲ誅伐シテ、亡父ガ本意ヲ遂ザルベキ」ト宣テ後、「抑、此合戦ノ事ヲ聞テ、秀衡ハイカガ申シシ」ト被レ尋ケレバ、「ユユシク感申候ゾ。新大納言已下ノ近臣ヲ失、三条宮、源三位入道ヲ誅レシ折節、殊ニハ、『イカニ兵衛佐殿ハ聞給ワヌヤラム』ト度々申候キ。去承安四年ノ春比ヨリ、都ヲ出テ、奥州ヘ罷下テ候シニ、秀衡、昔ノ好ヲ忘レズ、事ニフレテ憐ヲ至候キ。カク参候ツルニモ、甲冑、弓箭、馬ノ鞍、郎從ニ至マデ、併ラ出シ立ラレテ候。シカラズハ、争郎等一人ヲモ相具シ候ベキ。十余年ガ程、彼ガ許ニ候シ程ノ志、イカニシテ報ジ尽スベシトモ不レ覚候」トゾ、九郎義経申ケ

ル。(第二末「平家ノ人々駿河国ヨリ逃上事」)

頼朝が想起する逸話が異なる点について、眞野須美子⁽¹⁷⁾氏は「東国の人々にとつては、異国の項羽沛公の例よりも八幡太郎義家の故事の方が身近に感じられたのである」と述べる。また武久堅氏は「関東を中心に源氏方にて伝承されたものと推察され」る後三年合戦、登場人物の言葉があり、「この伝承に乗って頼朝も義経の参陣に後三年合戦の出来事を想い起こし、八幡太郎が舍弟義光に父頼義の面影を感じたように、弟義経に父義朝の姿を見た」、「少なくとも平家物語は頼朝の胸中をかく語らせて、感涙にむせぶ頼朝を再現する」と述べる。延慶本では「項羽がやがて沛公(劉邦)と対立するように」頼朝と義経・義仲が「宿命的な対敵関係に陥」るが、「頼朝項羽こそは逆に二人の沛公(劉邦)を次々とその劔にかけて葬ることになる」、「黄瀬川の兄弟対面は、その宿命の劫初であった」、「邂逅と離反の宿命をはるかに見はるかして、二人の運命の全体像を、『史記』に準えて取り押さえようとした文学的手腕は、すでに相当に趣向をこらした物語作者のものと評しうるであろう」と述べる。この場面で義経の口から見参を語らせ、それによって頼朝が涙を流すこと、また、東国武士にとって馴染み深く、場面に相応しい故事に後三年合戦を想起させ、頼

朝と義経が良き兄弟関係にあると強調している。

四、義経と頼朝の関係―義経の合戦理由―

次に平家一門の首の処遇をめぐる場面を確認する。便宜上、本文に番号を付した。

此頸共、各大路を渡し、獄門の木に懸けらるべきの由、範頼・義経共に之を申間、法皇思食煩ひて、蔵人の左衛門権佐定長を以て、太政大臣・左大臣・右大臣・堀河大納言に御尋有ければ、各一同に申されけるは、「先帝の御時、此輩は爵釐^{とナリ}の臣と為て朝家に仕へき。就中、卿相の頸を大路を渡し獄門の木に懸けらるゝこと、未だ其の例を聞かず。其の上、範頼・義経の申し状、強に御許容有るべからず」と申されければ、渡さるまじかりけるを、範頼・義経重て申けるは、「①父義朝の頸、大路を渡して獄門の木に懸けられたること顯然也。②而を父の恥を雪がんに為に、身を捨て合戦せしむる所也。③且は朝敵なり、④且は私敵なれば、⑤申請くる所、御許無きにおいては、自今以後何の勇有てか朝敵を追討すべき」と、義経殊に之を憤申しければ、大路を渡し懸けられにけり。彼の義経は、二歳の時義朝を討たれ、其行柄を知らず、廿五年星霜を送り、父の敵を

亡ける事、父子自然の理也。(巻八之下「卿相の頸、獄門の木に懸けらるる事」)

一門の首を曝すことは許し難いとする後白河院達に、範頼・義経は大路を渡すべき旨を訴え、義経が殊更怒りを露わにして奏上したとする。⁽⁹⁾三度に渡って兄弟の訴えだったものが最終的には義経に収斂されているのは、一門の首渡に義経が並々ならぬ思いを抱いていたからであり、

それが末尾の独自本文へと繋がっていくと考えられる。また、訴えは諸本で異同が大きい箇所である。闕諍録では、①父義朝も首を辱められたこと、②父の恥を雪ぐために戦ってきたこと、③平家は朝敵であること、④私敵であること、⑤訴えが叶わなければ朝敵追討に意義を見出せないことが述べられる。諸本をまとめると次のようになる。

⑤	④	③		②	①	闕諍録
⑤		重んじた	「君ノ仰」を	②	①	延慶本
⑤		重んじた	「君の仰」を	②		長門本
⑤			「君の仰せ」を重んじた	②	① 保元・平治の乱からの仇	四部本
⑤	②	んじた	「朝威」を重	③	① 保元・平治の乱からの仇	盛衰記
⑤		た	「君ノ御憤」を鎮めたかつ	②		屋代本
⑤		た	「君ノ御憤」を鎮めたかつ	②	①	百二十句本
⑤				②	た 「君の御憤」を鎮めたかつ 保元・平治の乱からの仇	覚一本

鬭諍録の義経は他本に比べて朝廷を重んじる意識が薄く、私怨によって戦ったという印象が強まるものとなっている。中でも平家を「私敵なれば」と明言している点には留意したい。平家が保元・平治の乱からの仇であるとして述べる本文にも同様の意は読み取ることができるが、身命を賭して合戦をしたのはあくまでも相手が朝敵であったためとし、私怨の強調を避けている。鬭諍録にそのような配慮は他本ほど見えず、義経の合戦の理由は仇討ちに終始しており、これも末尾の本文を際立たせるものであろう。更に、鬭諍録の独自の箇所について、服部幸造氏は『鬭諍録』の頼朝は、早くから平家を滅ぼすという大事を抱いていた、とされる⁽²⁰⁾とし、それは「流人時代の仁安二年から嘉応元年の時点」からで「頼朝謀叛の原点にあるのは」繰り返される⁽²¹⁾「〈父の敵清盛を討たん〉という決意」であり、「恩愛の情の延長上にあるもの」と指摘する。そして「義経もまた平家を『私の敵』と考えていたことは、一の谷合戦の後の『首渡』であきらかにされる」、「語り手の言葉、〈彼の義経は二歳の時……〉は『鬭諍録』の独自異文である」、延慶本等の他本が「大路を渡して獄門に懸けられた平家の人々に同情する人々をとらえるのに対して、『鬭諍録』は二十五年の後に父の敵を討った義経を称揚しているのである。まこと

に『血のケガレは血をもって贖わねばならぬ土俗思想に沿うもの』⁽²²⁾といえよう」と述べる。鬭諍録の独自本文は、頼朝が流人時代から打倒清盛（平家）の意志を持っていたことと合わせて、義経も長きに亘って兄と志を同じくしていたことを描いている。

五、義経と頼朝の関係―独自場面の挿入―

『平家物語』や『義経記』といった義経が登場する作品内において、彼は血氣盛んで才能溢れる若武者である。しかし、そうであるが故に頼朝・梶原景時と対立してしまふ。義経と景時の人物像と関係性を浮き彫りにするものが逆櫓論争で、この諍いは多くの諸本に収められる。鬭諍録には巻自体がないが、諸先行研究では鬭諍録の世界観に逆櫓論争は存在しなかっただろうとされる。以下、その根拠となる場面を引用する。

同三月廿九日、三河守範頼大將軍と為て数万騎の軍兵を引率し、西国へ下向しける程に、室・高砂に留まり居て、遊君・遊女を召集め、遊戯を宗と為て日を送るの間、国の費え、民を煩ふこと限り無し。同十一月廿八日、梶原平三景時、竊に九郎判官の許に参向して申は、「三河守殿大將軍と為ては、年月を経と雖も、更に平家を迫め落すべからず。君は次将、

吾等末将也。数万騎の軍兵を以て八嶋の館へ押寄せ、
忿ぎ平家を打落さん」と申す。義経言けるは、「鎌
倉殿より大將軍の仰を蒙らざれば、争か兄三河守を
越えて八嶋を追むべきや。其儀有らば、汝子息一人
関東へ差下し、事の子細を申さるべし」。義経の命
に依て、景時の甥生田次郎景幹、関東へ下さる。鎌
倉殿、子細聞食されて言ひけるは、「範頼合戦の道
延引せしめければ、自今以後においては、九郎冠者
を大將軍と為よ。実平には頼朝が旗を差し、軍の成
敗を加へ、平家を亡ぼすべし」。(卷八之下「惟盛、
熊野参詣の事 付那智の渥に身を投げらるる事」)

範頼が室高砂で足踏みをしていたことは諸本で共通するが、それに対して景時が義経に進軍を勧めること、それを受けた義経が兄を憚って頼朝の指示を仰ぐこと、頼朝によって大將軍に任じられること、以上三点は闘諍録の独自記事である。岩瀬博氏は景時が世の人々から嫌われた「最大の原因は悲劇の主人公源義経の讒言者」だったためで、平家物語諸本では「歴史的事実を退け、景時の義経との対立、頼朝への讒言を一直線に突き進む」と述べる。そういった本文の中で「景時を史実以上に偉大化した伝本」に闘諍録を挙げる。「史実を誇張して讒臣に墮した描き方をする他本と真反対に、史実を枉げて実

力者景時の造型に腐心してゐる闘諍録には恐らく義経、景時の軋轢はつきりとは描かれてゐなかつたであらう」とする。⁽²⁴⁾ 早川厚一氏は、頼朝と義経の「仲を裂く役回りを演ずる景時と言う図式が闘諍録には見られない」とし、「義経は兄頼朝の意向を尊重し、ついには頼朝の信任を得て、兄範頼に代わり大將軍に任命」され、また「義経を補佐する景時にも好意的な視線が注がれている」と述べ、闘諍録には「逆櫓論争、さらには頼朝と義経との確執さえ構想されていなかった可能性」を指摘する。更に、このような改変が行われたことで「常胤を筆頭とする千葉一族の屋島合戦や壇ノ浦合戦での活躍が期待される」が、『平家物語』では「愚味な大將軍」範頼麾下の兵であつたため「特筆すべき活躍」がなく、「闘諍録編者にもそうした話の手持ち」がなかったために、この巻では以降の大きな合戦において「常胤一族の活躍を仄めかす形で物語全体の幕を閉じようとするのではなからうか」と、これ以上の展開を想定していないとする。頼朝・景時と義経の関係が円滑であれば、その麾下にある千葉氏も後の合戦において重要な役目を果たすという闘諍録生成基盤に深く関わった場面増補、人物像の改変である。義経と頼朝(或いは景時)が、『平家物語』諸本や『義経記』等の文学作品に見える確執ある兄弟ではなく、志

を共にし、互いを信頼する良き兄弟関係にあったと殊更に描くために、闘諍録は様々な工夫をしていることが分かる。

六、義経造型への配慮―他者と争わない義経―

頼朝・景時との関連の場面でのみ、義経像は工夫されているのだろうか。ここで、闘諍録の義経造型が特異なものとして一谷合戦の場面を引用する。便宜上、本文に番号を付した。

六日、夜に入て、九郎義経、鶴越と云ふ深き山路へ打入たれば、木々の梢も森けり。馬の足立も見えず。
①「哀れ、此勢の中に案内者有るらむ。参て前打仕かし」と義経言ひければ、音する人も無き処に、②武蔵の住人平山武者所季重進出て、「某こそ知て候へ。御前打仕らん」と申ければ、③義経此を聞き、「何に。平山は武蔵国の者なり。而も初ひ京上ぞかし。始て見る西国の山の案内をば、争か知るべき」と言ければ、④諸人聞きも敢へず、拔と笑けり。⑤平山申けるは、「敵の籠たる山の案内をば、剛の者こそ知候へ。指せる咒師シユか猿楽か、意得ぬ殿原の笑様哉」と、少しも返事為ば組落として勝負しぬべき気色にて、悪々と申ければ、一言の返事為る者の更

に無し。⑥義経「尤とも然べし」と言ける上は、敢て尤トカむる輩も無かりけり。(中略…平山は道案内のために現地の仙人父子を捕えていた)……⑥其時笑つる者共、「道理にて平山は、知らぬ山の前打為むと申ける。吾等加様の計までは思寄らず。恐ろし恐ろし」とぞ申ける。(巻八之下「一谷・生田森合戦の事」)

義経が道案内できる者を求めると季重が進み出る。しかし、東国で生まれ育った者が初めて踏み入る山の案内をできようかと退け、周囲の者が嘲笑する。季重はそれに激しい怒りを見せ、義経が季重の発言を「尤もである」としたために人々は沈黙した。この場面は諸本によって①道案内を求めた者、②名乗り出た者、③それを咎めた者、④周囲の反応、⑤名乗り出た者の言い分、⑥末尾に異同が見られる。諸本をまとめると次のようになる。²⁶⁾

①	義経	義経	義経	義経	義経	覚一本
②	季重	重房	重頼	平山	季重	季重
③	義経	重頼	侍共	御方の者共		義経
④	諸人が笑う	重頼が笑う	侍共が笑う	罵る		
⑤―1	剛の者なら知っている	歌人の心得を出し、剛の者なら知っていると	歌人の心得を出し、剛の者なら知っていると	歌人の心得を出し、剛の者なら知っていると		歌人の心得を出し、剛の者なら知っていると
⑤―2	挑発的な態度			挑発的な態度		
⑥―1	義経、言いつ分を認める	人々は理を認めるが、案内できる者は見付からない	諸人、傍若無人だと笑う	合戦の前だからと誰も相手にしない		傍若無人と評される
⑥―2	季重の計略に感服		義経が言いつ分を認め、後に平山が案内者を連れてきて見直される			

この場面について『延慶本平家物語全注釈第五本（巻九）』で、「〈四〉では、人々が『傍若無人』と笑う」が、「義経が季重の言いつ分にも『理』を認め、さらに季重が案内者となる鷲尾を連れてきたことで見直される」、一

方「〈覚〉ではその後すぐに別府小太郎の老馬に関する進言に移るので、季重の発言は黙殺されたようにも読める」、「〈中〉は『傍若無人』との評に人々が笑ったところで終わる」、「〈闘〉は名乗り出た季重をとがめた義経

の発言に人々が笑い、それに対して季重は怒ったが、その後、驚尾を捕らえたことで季重は見直されたと描く、〈南〉は「人々の反発を描く」と整理される。季重を嘲笑の対象にするのは、その後の「計りこと」(道案内をあらかじめ用意していたこと)を効果的に演出するためであり、展開としては四部合戦状本に近似する。しかし、義経によってその場の笑い者にされた季重の怒りは殊更激しく、周囲に挑発的な態度をとるなど、他本には見られない描かれ方である。義経と意見が対立し、相手が笑い者となる展開は逆櫓論争における義経と景時を想起させるが、この場面の義経は悪態をつく季重を咎めることもなく、その言い分を認めている。

逆櫓論争において、景時の「逆櫓をつけるべき」という言い分は戦略上では尤もなものであったが、血氣盛んな義経は提案を退けた。二人の在り方が端的に表れた箇所であろう。この場面は、東国育ちである季重に道案内は難しいだろうに、何故名乗り出たのだと周囲の笑いを誘うものであり、季重の考えが発覚するまでは義経の言い分が正しい。しかし、義経と周囲の反応に対し、季重は怒りを露わにする。逆櫓論争に見えるような義経であれば、このような態度を果して許すだろうか。そういった読み手の予想を裏切って、義経は季重の言い分を意図

は不明だが認め、それにより周囲も沈黙することになる。後に季重は見直されるので、義経が更に糾弾するのを避けたのかとも考えられるが、ここではやはり他者と対立することがない義経を強調するためであろう。後に頼朝や景時と反目するような人物ではないと、この場面の季重とのやりとりでも示しているのである。

この場面の後、義経は奥州まで共に行く部下を得る。以下、引用する。

此の少冠を見れば、兒氣色肝際善き男也。御曹司目を懸け、思はれければ、「汝が親をば何と云ぞ。汝が名をば誰と云ぞ」と此を問へば、「父をば猿尾の庄司と申候。某は猿尾の三郎と申候」と答へけり。

御曹司、彼を道指南に爲て、鶴越へ向かはれけり。

其より猿尾の三郎、聴て御曹司に思付き奉り、陸奥まで下り、最後の共仕けるは、此の猿尾三郎の事也。

この箇所は四部合戦状本には「義経、鎌倉の右大将殿の勘当を蒙りて、為ん方無くして奥州平泉へ落ち、衣河の落松の戦にて討死に仕り候ふ時」、百二十句本には「御曹司、鎌倉殿卜中違テ奥州ニテ討レ給ヒシ時」、覚一本には「平家追討の後、鎌倉殿に中違うて、奥州で討たれ給ひし時」等とあり、義経が奥州へ下った理由を頼朝との仲違いであると明記している。闘諍録では義経の奥

州下向は自明のことであっても、頼朝との仲違いであると明言するのは避けているように読める。本文を取捨選択し、兄弟間に諍いがなかったように書くことを徹底しているのである。

七、おわりに

義経が景時の讒言によって頼朝と仲違いをする『平家物語』諸本の中で、鬨諍録では三人の関係が良いものとされる点は従来指摘されてきたが、義経側にも意図的な加筆や改変がなされていることを述べた。頼朝の許に義経が馳せ参じる場面では、義経自身に見参を語らせ、相應しい逸話を頼朝に語らせることによって、二人が良き兄弟関係にあるとしている。また、平氏一門の首渡の場面では、訴えの言葉から義経が強い打倒平家の念を持っていることが分かる。それは末尾の独自本文を殊更強調するもので、流人時代の頼朝を想起させると共に、二人が志を同じくしていたことを描いている。更に、範頼が室高砂に逗留し、進軍しなかったとする場面では景時が義経に進軍を勧め、頼朝の指示を仰ぐという独自記事が見られ、三人に確執がないかのように読み手に思わせている。加筆や改変によって義経が後に頼朝に追われることがないような世界観を作り上げているが、頼朝・景時

に関わらない場面であっても世の人々が持つ義経像とは異なる描かれ方をしているものとして、鶴越の道案内の場面を挙げた。義経の宥めによって人々の笑い者となった季重は激しい怒りを露わにする。これは逆櫓論争に通ずるところがあるが義経は季重を責めず、言い分を認めて場を収めた。鬨諍録において義経という人物が味方と対立するのを良しとしない性格であることが分かる箇所である。

鬨諍録が成立したとされる東国、中でも千葉氏周辺における義経の扱いについて、早川氏が指摘するように、範頼よりも義経の元に配属される方が、その後の活躍が期待されるだろうと考えられている。しかし、頼朝・景時との関係性に関する様々な改変によって、広く認識されていたであろう義経像との間に乖離が生じている。逆櫓論争、またそれ以降の合戦の構想が無かったという点も義経の英雄像を弱めるものである。鬨諍録の世界観において、源氏の棟梁頼朝は重視されるが、義経はあくまでも弟に過ぎず、その存在感を強調する訳にはいかなかったであろう。結果として華やかな活躍も描かれないが、それによる後の悲劇も無いという、源氏兄弟が袂を分かつことがなかった物語となっている。

注

- (1) 闕諍録は変体漢文で書かれており、本稿では私に読み下した。参考にしたのは『未刊国文資料第二期源平闕諍録と研究』（未刊国文資料刊行会、一九六三年）、『源平闕諍録』（上・下、講談社、一九九九年・二〇〇〇年）である。
- (2) 「平家物語考（五）」（『国学院雑誌』第十七卷第六号、国学院大学、一九一一年六月）。
- (3) 『平家物語諸本の研究』（富山房、一九四三年）。
- (4) 「源平闕諍録による平家物語古態の探究」（『説林』第一号、愛知県立女子大学国文学会、一九五七年十二月）。
- (5) 「源平闕諍録管見―其の成立基盤をめぐって―」（『国語と国文学』第三十八卷第八号、至文堂、一九六一年八月）。
- (6) 渥美かをる氏「『源平闕諍録』における源氏関係記事増補の意図について」（『国文研究』第三号、名古屋国文学研究会、一九七四年三月）は「『闕諍録』は頼朝挙兵から富士川までを、その足どりに従って書くこととするのが目的であつた」と述べ、「ただ資料が千葉氏関係の資料、武蔵における資料などとまちまちであるから、千葉氏関係に妙見信仰のからんだ部分が特別視され勝ちになると思う。しかし千葉氏一族が功績を入れこんだ『一族の平家』を作ろうとしたのではなく、頼朝の足どりに添って坂東平氏が帰順するさまを描こうとしたことは間違いないであろう」と述べている。
- (7) 「源平闕諍録の再吟味」（『国文学 言語と文芸』第六卷第一号、明治書院、一九六四年一月）。
- (8) 「頼朝伊豆流離説話の生成―平家物語・曾我物語より―」（『国語と国文学』第四十三卷第六号、至文堂、一九六六年六月）。
- (9) 服部幸造氏「『源平闕諍録』の頼朝伊豆流離説話」（『国語国文学』第二十七号、福井大学国語国文学会、一九八八年四月）、眞野須美子氏「『源平闕諍録』の頼朝伊豆流離説話に関する考察」（『文学研究』第四号、聖徳学園短期大学国語国文学会、一九八八年十二月）等。
- (10) 岩瀬博氏「『前平家』に関する二三の問題―平家物語説話群の成立基盤考―」（『国学院雑誌』第六十七卷第三号、国学院大学、一九六六年三月）、眞野須美子氏「『源平闕諍録』の研究―梶原景時を中心に―」（『青山語文』第十五号、青山学院大学日本文学会、一九八五年三月）等。
- (11) 野口実氏「特集 平氏と平家物語 坂東平氏と『平家物語』―上総広常・『源平闕諍録』・畠山重忠のことなど―」（『軍記と語り物』第三十八号、軍記・語り物研究会、二〇〇二年三月）、徳竹由明氏「『源平闕諍録』に於ける関東武士団の描写について―上総氏を中心に梶原氏・和田氏に及ぶ―」（『軍記と語り物』第四十一号、二〇〇五年三月）等。

(12) 『源平闘諍録』——その千葉氏関係の説話を中心として——

『人文論叢』、東京工業大学、一九七五年十二月。

(13) 闘諍録と千葉氏、妙見説話との関わりについては、渥美かをる氏『源平闘諍録』における源氏関係記事増補の意図について（注6参照）の指摘から始まり、眞野須美子氏『源平闘諍録』と千葉氏——その成立事情に関する一考察——（『青山語文』第十号、一九八〇年三月）、早川厚一氏『源平闘諍録』と『千字集抄』（『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』第二十三卷第二号、名古屋学院大学産業科学研究所、一九八七年一月）、眞野須美子氏『源平闘諍録』の妙見説話について（『青山語文』第十七号、一九八七年三月）、福田豊彦氏『千葉妙見宮の古伝承と『源平闘諍録』（『妙見信仰調査報告書』第二号、千葉市立郷土博物館、一九九三年三月）、宮原さつき氏『千葉妙見』の本地をめぐって（同上）、丸井敬司氏『房総での源頼朝の動向に関する一考察——千葉の妙見古伝承と源頼朝の動向——』（『妙見信仰調査報告書』第三号、一九九四年三月）、眞野須美子氏『源平闘諍録』に見られる千葉氏の妙見伝承（同上）、佐々木紀一氏『源平闘諍録』の板東平氏・北条氏・千葉氏一族系譜について（『米沢国語国文』第三十五号、山形県立米沢女子短期大学国語国文学会、二〇〇六年十二月）、源健一郎氏『千葉妙見の本体・本地説——源平闘

諍録と千葉妙見社関係資料との間——（『巡礼記研究』第三号、巡礼記研究会、二〇〇六年九月）等がある。眞野須美子氏は千葉氏の妙見伝承の変遷から、闘諍録の成立を十三世紀半ば頃と想定した。

(14) 『源平闘諍録』考——その成立をめぐって——（『名古屋学院大学国語国文学』第三十八号、名古屋学院大学国語国文学会、一九七六年六月）、『源平闘諍録』成立考——源氏蜂起記事をめぐって——（『軍記研究ノート』第七号、名古屋大学軍記物語研究会、一九七七年十二月）、『源平闘諍録』の創作方法のあり方について——巻八上を中心として——（『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』第十八卷第一号、一九八一年十月）、『源平闘諍録』の巻立てと構成（『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』第十九卷第一号、一九八二年九月）、『源平闘諍録』と真字表記（『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』第十九卷第二号、一九八三年三月）、『源平闘諍録』の説話受容の方法——一谷合戦話における——（『名古屋学院大学国語国文学』第五十三号、一九八三年十一月）、『源平闘諍録』の真字表記——訓点について——（『松村博司先生喜寿記念 国語国文学論集』、右文書院、一九八六年）、『源平闘諍録』に見える南都本的本文について（『日本文学史論——島津忠夫先生古稀記念論集——』、世界思想社、一九九七年）、『源平闘諍録』は五冊本で成立した

か」(『名古屋学院大学研究年報』第二十三号、名古屋学院大学総合研究所、二〇一〇年十二月)等。

- (15) 『平家物語』と東国―源平闘諍録と延慶本をめぐって―
「『あなたが読む平家物語』」平家物語の成立、有精堂、一九九三年。

- (16) 再会の時と場所は諸本によって異なる。『延慶本平家物語全注釈第二末〈巻五〉』(汲古書院、二〇一一年)は「頼朝と義経の参会を富士川合戦前に記すのは〈延・長〉及び『義経記』」、「〈盛・四・闕・南〉は、富士川合戦後に記す」、「参会の場所は、〈四〉は明らかではないが、〈延・長〉や『吾妻鏡』は黄瀬川、〈盛・闕・南〉『義経記』は浮島原」とまとめる。

- (17) 注10参照。

- (18) 「平家物語における頼朝と義経―『黄瀬川対面』の原光景―」(『広島女学院大学国語国文学誌』第十七号、広島女学院大学日本文学会、一九八七年十二月)。

- (19) 最後の訴えを範頼・義経が行ったものとするのは南都本(「範頼、義経被申ケルハ……憤り申サレケレバ」・覚一本(「範頼・義経重ねて奏聞しけるは……兩人頻に訴へ申間」)。義経一人のものとするのは延慶本(「殊二支申ケレバ」・長門本(延慶本と近似)・盛衰記(「九郎義経重ねて奏し申しけるは……殊に憤申ければ」・屋代本(「義経

ガ申ケルハ……ト申ケレバ」・百二十句本(「義経殊二憤り申レケレバ」)。闘諍録と同様、二人の発言から義経一人に変わっているものは四部合戦状本(「範頼・義経重ねて奏しけるは……義経殊に申しければ」)。

- (20) 注9参照。

- (21) 卷一之上「右兵衛佐頼朝、伊東の三女に嫁する事、伊東三女との間に千鶴が生まれた場面で頼朝はこの子が十五になったら東国を率いて都に上り「父の敵清盛を打たん」と言う。また、同「頼朝の息子、千鶴御前失なはる事」、伊東祐親によって妻子を失った頼朝は、憤る部下を「然れども頼朝、当国に流罪せられしより以来、父の敵清盛を討たんと欲ふ志、日夜朝暮に晴れ遣らず。然るに、何ぞ大事の敵を聞いて、小事に命を失ふべけんや」と言って止める。更に同「頼朝、北条の嫡女に嫁する事」、伊東の館を出奔する際に「兼ねて言ひしが如く、未だ父の敵清盛入道を討たざる間、何事の有りとも我と騒ぐべからず。相ひ構へて、汝等抑へ静むべし」と言う。流人時代に三度、清盛を討つ意志を述べる。

- (22) 福田晃氏「曾我物語・義経記の思想―真名本曾我物語を中心に―」(『日本文学講座4物語・小説1』、大修館書店、一九八七年)の引用。

- (23) 注10参照。

(24) また、景時の偉大化について「当時の人々には怨霊として畏怖される存在」であり、「御霊神に奉仕する家柄」だったために景時信仰が存在し、「闘諍録の、げじげじ梶原とは正反対の方向で形成されてゐる景時像は贅言して来た鎌倉びとの景時信仰を基盤としてゐたものであらう」と指摘する。眞野須美子氏『源平闘諍録』の研究―梶原景時を中心に―(注10)は、逆櫓論争は構想としてあっただろうとするが、義経に進言する景時が造型されたのは「源平の闘諍の一翼を担う源氏の軍兵は、景時が催したものであることを強調するため」で、「人間像の矛盾を来たしてまで、義経への進言という虚構を設定している」、「坂東平氏の一族である梶原氏」は、「鎌倉幕府の草創に功績のあった重臣」で「悪玉としてのイメージ」から離れていると述べる。

(25) 『源平闘諍録』は五冊本で成立したか(注14参照)。

(26) 長門本は延慶本の「理力ナ、面白シ」という反応の後に「御曹司、是をきき給て、『傍若無人なり』とぞの給ける」とする。盛衰記も長門本同様、評が併記される。

(27) 『延慶本平家物語全注釈第五本(巻九)』(汲古書院、二〇一五年)。

(28) 『延慶本平家物語全注釈第六本(巻十)』(汲古書院、二〇一八年)は、山本幸司氏『頼朝の精神史』(講談社、

一九九八年)から「当時の武士が暴男に走るのみではなく、慎重な配慮を重視したと指摘し、逆櫓論争に見える景時の態度も、そうした常識に近いものであったと見る」とする。(29) この場面の延慶本、長門本には該当箇所はない。盛衰記には「判官奥州へ落下給し時……奥州平泉の館にして、最後の伴をしたりしも」とあり、闘諍録に近い。

本稿で用いた諸本は以下の通りである。本文は適宜表記を改め、私に句読点を付した。

延慶本(『平家物語^{延慶本}対照本文』中・下、勉誠出版、二〇一一年／『延慶本平家物語全注釈』第二中(巻四)・第二末(巻五)・第五本(巻九)・第五末(巻十)・第六本(巻十一)、汲古書院、二〇〇九・二〇一一・二〇一五・二〇一六・二〇一八年)、長門本(『平家物語^{長門本}対照本文』中・下、南都本^{南都本}『平家物語』、汲古書院、一九七一・一九七二年／『札幌大学教養部札幌大学女子短期大学部紀要』第十三号・第十六号、札幌大学、一九七八年九月・一九八〇年三月)、四部合戦状本(『四部合戦状本平家物語』、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編校、汲古書院、一九六七年／『訓読四部合戦状本平家物語』、有精堂、一九九五年)、『源平盛衰記』(国民文庫刊行会、一九一〇年)、覚一本・屋代本^{屋代本}(高野本^{高野本}対照平家物語)三、新典社、一九九三年)、百二十句本(『斯道文庫古典叢刊之二 百

二十句本平家物語』、汲古書院、一九七〇年）。

本稿は、二〇一九年度伝承文学研究会名古屋例会（十一月二十四日、於中京大学名古屋キャンパス）及び、同年名古屋大学国語国文学会秋季大会（十二月十四日、於名古屋大学）で口頭発表した論をまとめたものである。ご指導賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

（はたなか・まなみ／名古屋大学大学院日本文学専門博士課程
後期）